



美味しいそばの原点 福井のそば畑

永平寺町、南越前町

良いそばが育つ環境は、昼と夜の寒暖の差が大きく、霧が深くかかることだという。福井の気候・風土とそばは相性がいいのかも知れない。そばの花が咲くと福井に秋が訪れたと実感する。



県内のあちこちに広がるそば畑（写真は永平寺町）



全国素人そば打ち名人大会

9月から10月にかけて、白く可憐な花が咲き誇るそば畑の風景を県内のいたるところでみることができます。

そばは、旧盆をすぎた頃に種がまかれ、白い花が咲き終わると黒い実になる11月上旬から収穫がはじまります。種まきから収穫まで、その作業ごとに農村風景は色合いを変えていきます。

福井のそばは、信仰とも深くかかわりがあり、報恩講の屋食（精進料理）として食べられていました。また、味や風味の高いそば粉が多いといわれる北緯36~38度に位置する福井県では、昔から栽培・収穫が盛んに行われ

食べられてきたという背景もあり、特に品質が高いといわれています。また、福井のそばの美味しさをPRするために始まったのが、「全国素人そば打ち名人大会」です。全国のそば打ち愛好家たちで賑わい、盛り上がりを見せています。



南越前町で開かれる今庄そばまつり①



そば打ち体験で賑わう今庄そば道場

福井の名物となっている「越前おろしそば」の発祥は越前市といわれています。約400年前、本多富正公が府中（現在の越前市）に着任した際に京都からそば師を連れてきて、大根おろしで醤油をのぼしてだしにする食べ方を広めていったことがおろしそばのルーツと言われています。



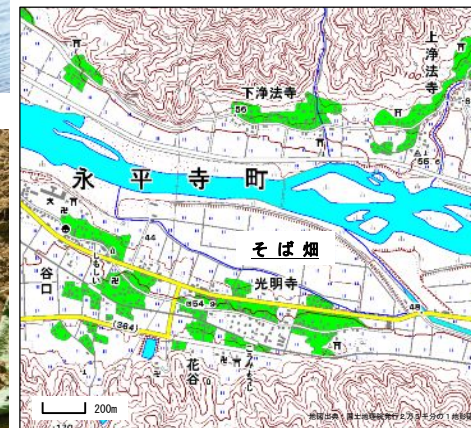
福井名物「越前おろしそば」



おろしそばには欠かせない辛味大根

また、県内にはそば打ち体験ができる施設が数多くあり、子供から大人まで幅広く、そば打ちを楽しむことができます。

厳しい自然の中で丹念に栽培されてきたそばが、福井の歴史や風土に根ざし、県民に広く親しまれてきたことがうかがえます。



写真①は南越前町提供



敦賀湾の大パノラマ 杉津の眺望

敦賀市^{すいづ}杉津など

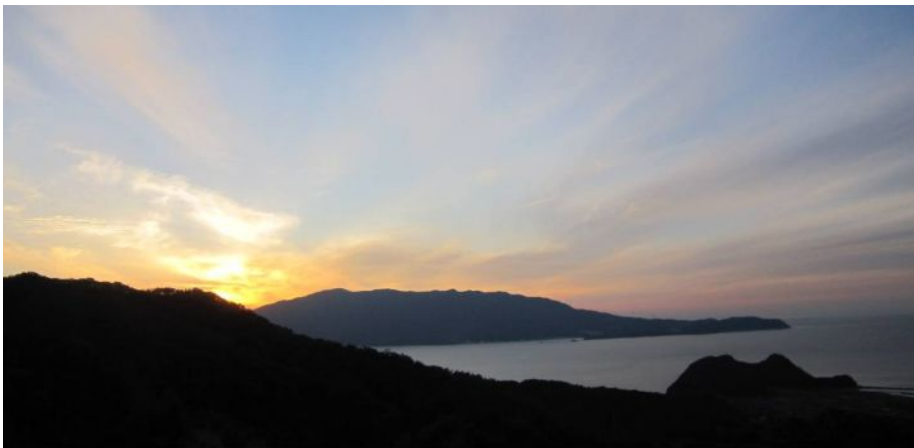
トンネルを越えて杉津に出ると、そこには青い宝石が広がっていた。大正天皇がお召し列車で見惚れた敦賀湾の眺めは、今も私たちの心をとらえて放さない。



北陸自動車道杉津^{すいづ}パーキングエリアからの眺望

杉津^{すいづ}パーキングエリアは、北陸本線旧線（昭和37年廃線）の杉津駅の跡地に建設されました。

杉津駅は、かつて「北陸線屈指の車窓風景」と車内アナウンスされたほどの景勝地であり、大正天皇を乗せたお召し列車が、その絶景に見惚れて暫く汽車の発車を遅らせたという逸話も残っており、杉津パーキングエリアからは、この逸話を思い起こさせるような素晴らしい景観を見ることができます。



夕闇迫る杉津^{すいづ}



山中峠^{すいづ}から杉津を望む



元比田^{もとひだ}のミカン畑^①



阿曽^{あそ}の棚田^②



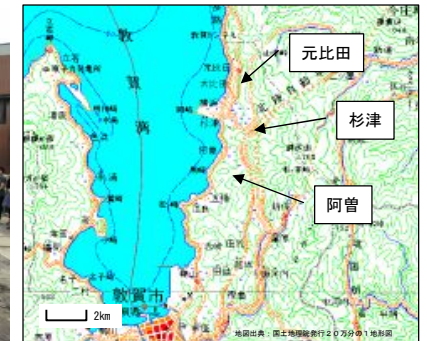
阿曽^{あそ}の棚田^③

敦賀はミカンができる北限地といわれ、地域の特産品として育てた東浦ミカンの畑を目にすることができます。また、近隣の阿曽^{あそ}地区に広がる棚田の風景などを見ていると、土地を大切にする地元の方の気持ちが伝わってきます。

阿曽^{あそ}地区の利棕八幡神社で毎年9月15日に行われる例祭にて、勇ましいかけ声とともに奉納される相撲甚句の踊りは、鎌倉時代から伝承され、江戸時代から途絶えることなく続いている伝統行事であり、謡われる相撲甚句は味わい深いものがあります。



阿曽^{あそ}の相撲甚句（県民俗文化財）^④



写真①～④は敦賀市提供



手付かずの自然が残る池河内湿原・中池見湿地

いけのこうち かしまがり
敦賀市池河内、檜曲

笹の川を遡り見つけた生き物たちの楽園。昔の姿をそのまま残す湿原への思いは、季節に応じて勇躍、変化する姿に出迎えられるという嬉しい裏切りにあうことで、自然の偉大さに対する望外の感嘆が胸を満たす。



いけのこうち
池河内湿原

敦賀市内をゆったりと流れる笹の川の源流付近に位置する池河内湿原は、周囲を山で囲まれた約4haの湿原です。

通称「阿原ヶ池」の名前で敦賀市民に愛されているこの一帯は、まだまだ手付かずの自然が残っており、生き物たちの楽園となっています。



春を待つ池河内



春 可憐に咲き誇るキタコブシ



なかいけみ
中池見湿地

敦賀市の市街地東に隣接する中池見湿地は、天筒山や周辺の山々に囲まれた25haの広大な湿地です。

風の音、野鳥のさえずりや虫の声、木々の香り、ひっそりと、また華やかに咲き競う野の花たちなど、四季折々の表情を見せてくれます。

中池見湿地には、茅葺屋根の家を背景に昔ながらの田んぼの風景が広がり、豊かな生き物たちと暮らす昔ながらの営みが残っています。



中池見湿地での農作業風景



運河の遺跡

ひきだふなかわ 足田舟川

ひきだ
敦賀市足田など

舟川を囲い、街道集落の面影を残す細長く連なる^{ひきだ}足田の町並みからは、荷を運ぶ喧噪の面影など歴史に縁取られた風情を感じる。



足田の町並みを通り抜ける舟川^①

江戸時代から宿場町として発達した^{ひきだ}足田地区では、町並みの中央を貫く立派な水路を見ることができます。

これは、敦賀港から京都に向けて物資を輸送するために設けられた運河（舟川）の遺構で、この舟川を海産物等の物資を積載した舟が往来しました。

^{しやう}笙の川から足田舟川まで続く運河を遡ると、舟が急流の中、曳き上げられる光景が思い浮かぶようです。



^{しやう}笙の川 中流



^{しやう}笙の川 河口（運河の始まり）



足田舟川に沿って続く町並み

足田付近の舟川は、急流のため水位が上がらず、積荷を満載すると舟底がつかえるため、川底に丸太を敷いて滑りやすくする工夫がなされ、道路に沿ったところでは幾人もの人夫により曳き上げられたそうです。



舟川の流れに親しむ



交通の要衝だった証、道標^②

写真①～②は敦賀市提供



75

360° 展望の頂 野坂岳

のさかだけ
いちのののさか
敦賀市市野々、野坂など

敦賀の最高峰、野坂岳に登る。北に敦賀湾、南に琵琶湖、西に三方五湖が見渡せる眺望に心躍る。



野坂岳^①



小浜線を見下ろす野坂岳

敦賀市南西部にそびえる野坂岳（標高914m）は、弘法大師により見出されたという伝承を残し、市内どこから見ても変わらないその姿は「敦賀富士」とも呼ばれ、古代よりその美しさを称えられた山です。

野坂岳には登山道が整備されており、片道約2時間半で360度周囲が開けた山頂にたどり着くと、そこから敦賀市全体を見渡することができます。



野坂岳から敦賀市街を望む^②



柴田氏庭園（国名勝）から見た野坂岳

江戸初期に建てられた柴田氏庭園の回遊式林泉庭園からは、借景にした敦賀のシンボル、野坂岳を望むことができます。

麓の野坂神社では、旧暦1月8日前後の日曜日に、室町時代から伝わる野坂地区の伝統行事である「だのせ祭り」が行われ、五穀豊穡が祈願されます。



だのせ祭り（県民俗文化財）^③



写真①～③は敦賀市提供



そびえる大鳥居 北陸の総鎮守 氣比神宮

敦賀市曙町、常宮など

敦賀のまちに秋の訪れを告げる例祭、大晦日の茅の輪くぐり…。
氣比神宮の朱塗りの大鳥居は、いつも優しく出迎えてくれる。



大鳥居（国重文）

市民に「けいさん」の愛称で親しまれる氣比神宮は、大宝2年（702年）の建立と伝えられており、7柱のご祭神を祀る北陸道の総鎮守として、敦賀の発展を見守っています。

春日大社（奈良県）、厳島神社（広島県）と並び日本三大木造大鳥居の一つとされる高さ11mの大鳥居は、まさに敦賀のシンボルにふさわしい堂々たる姿を見せています。

毎年9月には、氣比の長祭として有名な氣比神宮例祭が開催され、勇壮な6基の山車が市内を練り歩くなど、敦賀の街は祭一色となります。



勇壮な山車^①



氣比神宮 本宮^②



大鳥居前の参道周辺は昔沼地でしたが、1301年、時宗2世遊行上人他阿が敦賀に滞在中に参拝者が難儀していることを知り、浜から砂を運んで改修にあられたとの故事から、「お砂持ち神事」が伝わっています。

また、敦賀から色ヶ浜に向かう中間地点に位置する常宮神社は、安産、航海や漁業の神として信仰されており、毎年7月22日には、氣比神宮の祭神仲哀天皇が后である神功皇后を祭る常宮神社まで、船で海を渡る総参祭が行われます。



宮内から参道を望む^③



お砂持ち神事の像^④



常宮神社^⑤



総参祭^⑥



写真①～⑥は敦賀市提供



アジア大陸との交易拠点 国際港敦賀

ほうらいちょう あいおいちょう
敦賀市蓬萊町、相生町など

日本海側の主要な国際港として発展した港町敦賀。今日も外国のコンテナ船や高速フェリーが人や物資を運んでいく。



てつやま
天筒山から見る敦賀港の夜景①

敦賀港は敦賀湾奥部に位置する天然の良港として、古くから我が国各地域とアジア大陸を結ぶ交易拠点として栄えてきました。

1945年の大空襲の際にも奇跡的に焼失を免れた舟溜り地区には、昭和2年に竣工した旧大和田銀行本店建物（現敦賀市立博物館）、400年の歴史を誇る敦賀酒造の酒蔵、赤レンガ倉庫をはじめ、港都つるがの繁栄を示す景観が数多く残っています。



旧大和田銀行本店（県文化財）



敦賀酒造



赤レンガ倉庫（国登録文化財）②



古い倉庫群③



ふなだまり
舟溜り地区

毎年1月第3日曜日には、400年以上前から伝承されてきた敦賀西町の綱引き（夷子大黒の綱引き）が行われ、数百人の老若男女が「夷子（えびす）」「大黒」二つの軍に分かれて長さ50mもの綱を引き合います。綱引きの結果でその年が占われ、夷子が勝てば豊漁、大黒が勝てば豊作とされています。



敦賀西町の綱引き（国民民俗文化財）④



写真①～④は敦賀市提供

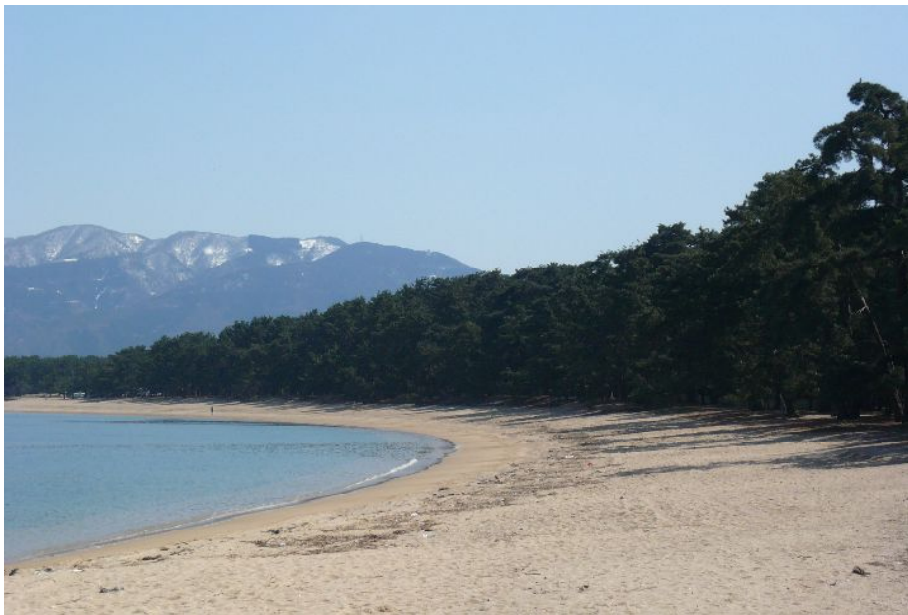


78

日本三大 けひ 気比の松原

まつしまちょう
敦賀市松島町

敦賀湾に沿ってきれいな曲線を描く気比の松原は約 1.5km 続く、散策には砂浜より松林の中の道だ。白砂に松の落ち葉が混ざり、ふわふわして足の疲れも取れる気がするから…。



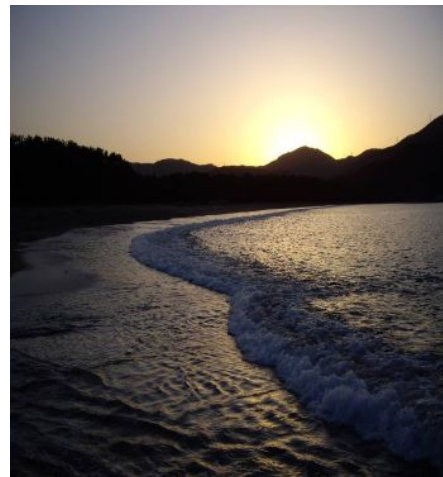
気比の松原（国名勝）①



夏の松原海岸②

三保の松原（静岡県）、虹の松原（佐賀県）と共に日本三大松原として知られる気比の松原は、40万㎡の広さの中に17,000本の松が生い茂る国の名勝地です。

また、夏になると京阪神、中京からの海水浴客による賑わいなど、季節・時間によって様々な姿を見せてくれます。



宵の松原海岸③



松原内の遊歩道④



高浜虚子の句碑

明治天皇は北陸巡幸の折、気比の松原に立ち寄られた際にその佳景を賞されました。勝海舟も松原を訪れた際、明治天皇の巡幸を回想して漢詩を詠んでいます。

また、高浜虚子も昭和32年にこの地を訪れ、どこまでも続く松原の姿を「松原の続かぎりの 秋の晴」と詠むなど、敦賀を訪れる人々に感動を与えています。



冬の気比の松原





コバルトブルーの海 水島と色ヶ浜

いろがはま たいし
敦賀市色浜、立石など

芭蕉が舟で渡った色ヶ浜、澄み切った海の向こうには「敦賀湾の真珠」と讃えられる水島が浮かんでいる。透き通った水と美しい砂浜、芭蕉の感動が伝わってくるようだ。



さざえがたけ
蛸螺ヶ岳から水島を望む①



いろがはま
色ヶ浜

敦賀湾に面し透き通った波に洗われるいろがはま色ヶ浜の近くには、砂の小島2つからなる水島が浮かび、別名「北陸のハワイ」とも呼ばれています。

目の前に広がる色ヶ浜の穏やかな海の表情からは、西行・芭蕉の受けた感動を味わうことができます。



ほんりゅうじ
本隆寺

奥の細道紀行の最終コースとなった色ヶ浜のほど近くには、芭蕉が宿泊したほんりゅうじ本隆寺があります。

芭蕉は色ヶ浜を眺め、波の音を聞きながらこれまでの旅を振り返りつつ、尊敬する西行に思いを馳せたのでしょう。

本隆寺にある3基の句碑は、色ヶ浜の風景から芭蕉が受けた感動を今に伝えています。



ほんりゅうじ
本隆寺の芭蕉句碑③



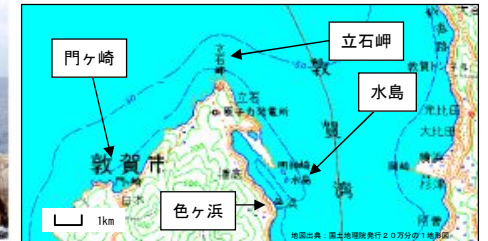
たていし
立石岬灯台

敦賀半島の最先端、立石岬の標高115mの高台には白色の洋式灯台があり、空の青い色と白亜の洋式灯台とのコントラストは大変美しく、港と共に発展してきた敦賀市のシンボルとして後世に引き継ぐべき貴重な財産といえます。

そして白木地区には、潮風を肌に感じることもできる断崖絶壁の景勝地門ヶ崎があり、高さ50m級の岩が立ち並び風景はミニ東尋坊とも呼ばれ、荒波が当たって砕ける様は、いかにも日本海らしい光景が広がっています。



もんがさき
門ヶ崎④



写真①～④は敦賀市提供



80

美しく輝く海と白い砂浜 水晶浜

美浜町竹波、菅浜など

道を進むと、目の前には透き通った海と眩しい砂浜が広がっていた。そこから見る風景は全てが美しく、美浜の名を実感し、見惚れてしまう。



弁天崎からの水晶浜①

美浜の名前が示すとおり、美しい海辺の風景は、美浜町の最大の魅力となっています。中でも「水晶浜」は、日本海の澄んだ水と、きめ細やかな白い砂浜が広がり、水の透明度などを基準に選ばれる「日本の水浴場88選」にも選ばれています。



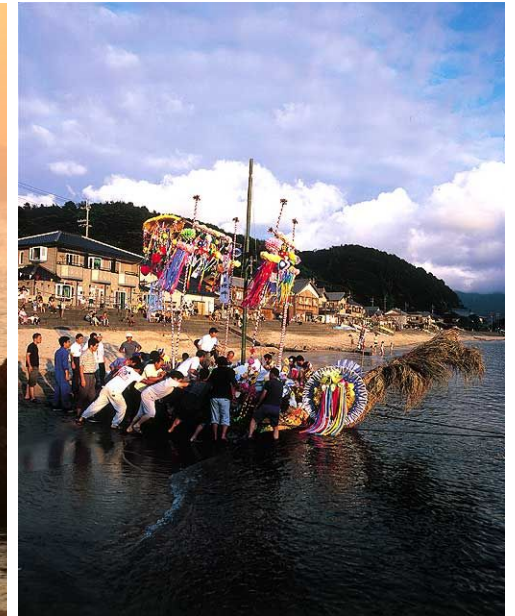
水晶浜



海水浴客で賑わう水晶浜

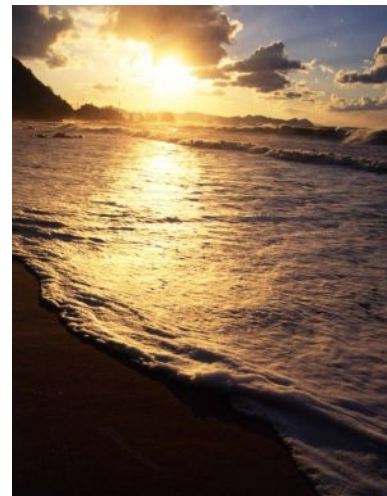


水晶浜から見る夕日①



菅浜精霊船送り (県民俗文化財)

また、水晶浜や隣接するダイヤ浜からは、美しい夕日を見ることができます。水晶浜に近い菅浜地区では、8月15日の夕方に、美しく飾られた精霊船が多くの人びとに見送られながら海へと送り出されます。水平線上の真っ赤な太陽が波や雲を染める中、お盆の間一緒に過ごした祖先の霊との別れが終わると、美浜には秋の気配が漂い始めます。



夕日のダイヤ浜②



写真①～②は美浜町提供